

小特集—音支援（音バリアフリー）を考える—

小特集「音支援（音バリアフリー）を考える」 にあたって*

荒井隆行（上智大学）**・上羽貞行（音バリアフリー調査研究委員会委員長/東京工業大学）***

43.10.Ln

1. はじめに

超高齢社会になった昨今、聴覚・視覚など感覚器機能や運動機能の衰えにより、日常生活に不便を感じる人も増加している。健常者を中心に設計されてきた現在の様々な環境を、誰もが使い易いように「音バリアフリー」の観点に立って改めて見直し、問題解決を図ることなどを役割とし、学会の社会貢献の一端を担うべく、「音バリアフリー調査研究委員会」がスタートした [1]。2006 年 9 月に初回委員会が開催されてから早 2 年半、委員会の活動を振り返りつつ、本学会における音バリアフリー分野の展開を追ってみる。

2007 年 3 月の春季研究発表会では、音バリアフリーに関する初めてのスペシャルセッション「補聴器システムによる“聞こえ”支援“音バリアフリーの実現を目指して”」が開催された。本学会会員にも現状を十分に理解してもらおうと共に、多くの協力を得て問題解決の展望を切り開くため、メーカーや研究者のみならず、聴覚障害をお持ちの方にも参加していただき、補聴器や補聴システムについてユーザの視点からも議論がなされた [1]。一方、スペシャルセッション実施に関連して、各研究分野によって「音バリアフリー」の捉え方が様々であることも議論された。そこで、“音バリアフリー”に関する共通認識を構築すべく、まず委員会内で「現状と課題」を担当ごとに調査することとなった。結果は 2007 年 6 月の聴覚研究会において報告され [2]、そのサマリーは本誌 63 巻 12 号の解説「音バリアフリーの現状と課題」にもまとめられた [3]。

更に 2008 年には、春季と秋季の研究発表会にてスペシャルセッションをそれぞれ企画。春には「生活『音』環境と音バリアフリー」と題して、バリアフリー新法、ユニバーサルデザイン、視覚障害・聴覚障害等に関する招待講演のほか、建築空間、音デザインや難聴など音バリアフリーに関する一般講演も多数あった。「音バリアフリー」を制度の整備、インフラストラクチャ整備促進のための行政への働きかけ、協力等を含めて社会全体として考えていくことの重要性が確認された。同年秋には「障がい者のための教育と音響学の関わり」というテーマで、音響教育調査研究委員会等と共催で開催した。教育と支援を中心に、招待講演と一般講演のほか、パネルディスカッションにおいて活発な議論が行われた。

そして 2009 年 3 月からは、よりまとまった議論ができる場として、新しく音支援（音バリアフリー）に関する分野が研究発表会に常設されることになった。本分野では、バリアフリー、ユニバーサルデザイン、音響福祉/福祉音響、コミュニケーションエイド、音案内、補聴、アシスティブデバイス、障害者・高齢者支援、障害者教育、障害者・高齢者・子供のための音環境、高齢社会等をキーワードに、広く様々な周辺領域も含めて音支援・音バリアフリーのテーマを取り扱う。本学会においては、これまでも各分野で関連する研究や発表が多数行われてきているが、既存の研究分野の枠を超えて一堂に会することで、更に発展的な議論がなされることが望まれる。

2. 本小特集について

音バリアフリーのテーマを追求していくと、そこには図-1 のように「社会」という枠組みの中で「人と人」、「人と環境」の関わりが見えてくる。本小特集では、その中の六つの視点から「音支援（音バリアフリー）」を考えたい。

* Foreword to the special issue on acoustic barrier-free topics.

** Takayuki Arai (Sophia University, Tokyo, 102-8554)
e-mail: arai@sophia.ac.jp

*** Sadayuki Ueha (Tokyo Institute of Technology, Yokohama, 226-8503)

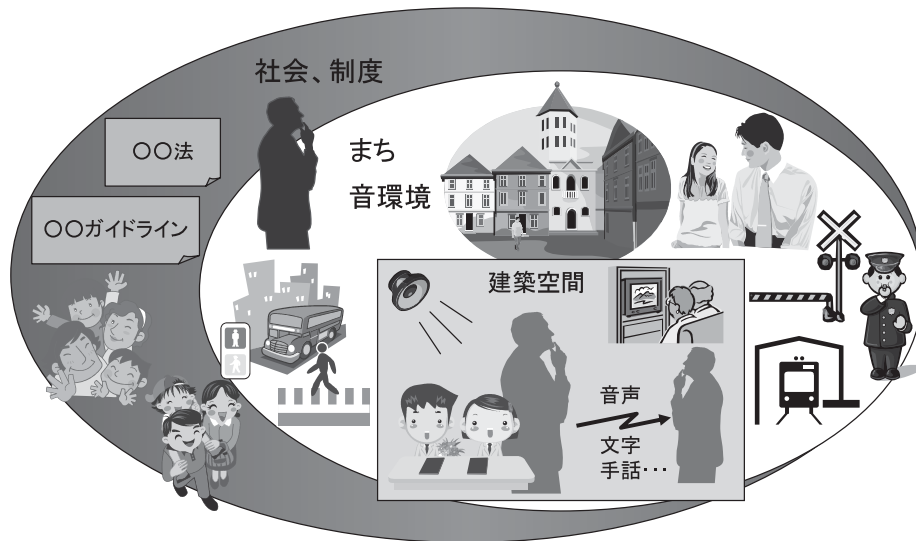


図-1 音バリアフリーに関わる概念図（文献 [10] の図を改変）

「音声コミュニケーションに関わるバリアフリー」では、聴覚情報の受信にバリアがある場合、音声発話にバリアがある場合など、音声コミュニケーションに関わるバリアフリーに焦点を当てる [4]。「聴覚に関わるバリアフリー」では、聴覚障害児教育や聴覚の加齢変化と高齢者の心理との関わり、並びに補聴援助機器について焦点を当てる [5]。「都市・建築空間における音バリアフリー」では、非常時の情報伝達におけるバリアに始まり、空間内の音声伝達の品質・評価や、誘導鈴を含む音響信号による「音案内」までを概説する [6]。「視覚障害者の音情報利用」では、視覚障害者の聴覚空間認知機構とその教育・訓練・今後の展望について述べ、音によるバリアフリー政策の経緯、現状、問題点、解決策について紹介する [7]。「バリアフリー法とその実践」では、バリアフリー法に至るまでの経緯や法体系の内容、近年の具体的取り組み、並びに今後の展望について述べ、五感重視のまちづくりについての考察や住民参加型のまちづくりとの関係、技術者・研究者の役割等に触れる [8]。最後に、「音のユニバーサルデザイン」では、視覚障害と聴覚障害の特徴を整理し、バリアフリーとユニバーサルデザインなど用語の定義と関連付けを行うと同時に、それらを土台にして音環境や音利用の現状を検討し、「音のユニバーサルデザイン」を実現する

ための課題を明らかにする [9]。

3. おわりに

音バリアフリーに関する研究には、分野横断的なアプローチが必要である。それぞれの分野での発展に加え、今までは個々の分野で議論されてきたことが分野をまたがって統合されることで、新しく展開されていくことに期待したい。

文 献

- [1] 上羽貞行, “音バリアフリー調査研究委員会発足,” 音響論集, pp. 479-480 (2007.3).
- [2] 倉片憲治, 坂本真一, 船場ひさお, 佐藤 洋, 栗栖清浩, 荒井隆行, 音響学会聴覚研資, 37(5), H-2007, pp. 353-382 (2007).
- [3] 上羽貞行, 荒井隆行, 栗栖清浩, 倉片憲治, 坂本真一, 船場ひさお, 佐藤 洋, “音バリアフリーの現状と課題,” 音響学会誌, 63, 723-730 (2007).
- [4] 伊藤憲三, 荒井隆行, “音声コミュニケーションに関わるバリアフリー,” 音響学会誌, 65, 132-136 (2009).
- [5] 倉片憲治, 立入 哉, 坂本真一, “聴覚に関わるバリアフリー,” 音響学会誌, 65, 137-141 (2009).
- [6] 佐藤 洋, 栗栖清浩, “都市・建築空間における音バリアフリー,” 音響学会誌, 65, 142-147 (2009).
- [7] 関 喜一, “視覚障害者の音情報利用,” 音響学会誌, 65, 148-153 (2009).
- [8] 三星昭宏, 北川博巳, “バリアフリー法とその実践,” 音響学会誌, 65, 154-158 (2009).
- [9] 武者 圭, “音のユニバーサルデザイン,” 音響学会誌, 65, 159-164 (2009).
- [10] 荒井隆行, “音声に関わるバリアフリー,” 音響学会聴覚研資, 37(5), H-2007, pp. 377-382 (2007).